

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

モンゴルの春：人類学スケッチ・ブック

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4579

28 「母になり、母でない」こと

第二十八日め（四月十二日）

晴れているが、きょうもつめたい風がつよくふきつける。

ゲルのうしろ正面から吹いてくるから、きょうもやっぱり北西の風。午前六時の気温はマイナス三度。典型的な、モンゴル高原の春の朝。

いままきに出産のピークをむかえている。うまれてくる数が多いので、哺乳補助の作業にも手間がかかる。夜間に出産したものを群れからとりわけ作業よりもまきに、朝の哺乳補助作業をすませてしまふようになった。

午前七時。モージ母とホクシン・エージは、子守をひきうけ、若い三人の女たちが石垣へレムのなかにはいる。子ヤギや子ヒツジを手にとり、腹の具合をたしかめる。乳を十分に飲んでいなければ、乳母をさがす。適当なヤギやヒツジから乳を拝借させる。腹の具合から乳を飲んでいようでも、とりあえず実母をさがす。実母のまえにはうりだし、母が実子を見とめているかどうか、確認しておく。

本家の嫁セルゲレン、分家の嫁サラントヤー、エルデニ姉の三人は、それぞれ自分の家の所有する家畜の面倒をみている。羊人ソヨルトのヒツジは、本家で管轄しており、セルゲレンが世話をする。ことが多いが、エルデニ姉がチェックしているときもある。ホクシン・エージが子守をしてくれているときに

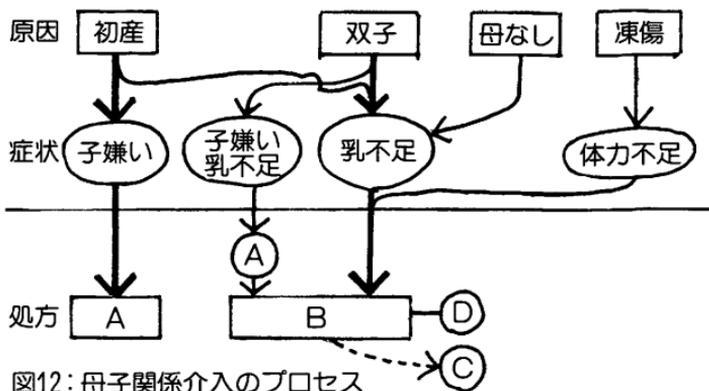
は、彼女のヒツジ・ヤギの世話をサラントヤーが代行することもある。

このように分担しているので、いいかえれば、本家と分家とエルデニ家の三者のあいだでは、たがいにどの子畜がどんなふうに介添されているのか知られていない。三人はそれぞれ他人の作業を具体的に関知していない。たとえば、エルデニ姉は、介添の必要な子ヒツジ・子ヤギをしばしば柳条製の柵のなかにいれていたが、それらの子畜がどうしてそのようにされているのかをサラントヤーは、まったく知らなかった。

この日、本家の嫁セルゲレンは、四月九日うまれたのソヨルトの小さな子ヤギを、実母ヤギとは別のヤギにあてがって寄乳する。未成熟段階で出産したヤギの子なので、乳不足をきたしているのである。分家の嫁サラントヤーは、四月十日にみなし子ヒツジと判定された子を、二頭のヤギにあてがった。乳母ヤギのうちの一頭は子をうしなっているの、やがて養母にするかもしれない。エルデニ姉は、四月八日にうまれた双子ヒツジの片方をヒツジとヤギに寄乳する。しばらくするうちに、ホクシン・エージがゲルから子ヤギをつれてやってきて、きのう出産した自分のヤギに寄乳した。その子ヤギは、昨夜、もう死ぬだろうとあきらめていたものである。

人類は、子畜の養育を、ながい時間をかけて発展してきた家畜化行為のプロセスにおいて、おそらく搾乳をはじめ以前から実施していたであろう。搾乳以前を想像しながら、搾乳シーズン以前の季節をみつめていると、搾乳とは別の、乳をめぐる生態がくりひろげられている。母子関係への介入という生態である。三十日間の生態を整理してみよう。

毎日、だれかが、なんらかの母畜・子畜に対して介入していた。母子関係になんらかの異常があるから、介入したのである。それらの主要な原因は、子嫌いと乳不足との二つにわけられる。いずれの場合



	ヤギ	ヒツジ	計 (%)
初産 ^{※1} による子嫌いなど ^{※2}	5	1	6 (23.1)
双子による乳不足など	3	7	10 (38.5)
その他の子嫌い	2 ^{※3}	1	3 (11.5)
その他の乳不足	0	2	2 (7.7)
その他	1	4 ^{※4}	5 (19.2)
計	11	15	26(100.0)

表6：介入契機の種類

母子関係への介入は、26の仔畜について観察された。

※1 ここでいう初産は未成熟段階での初産をいう。

※2 初産や双子の場合、子嫌い現象や乳不足をしばしば併せている。

※3 うち1件は初産(成熟段階)である。

※4 みなし子ヒツジはここに含まれている。

表7：介入タイプの種類

	A型 母子紐帯強化	B型 寄乳	C型 養子縁組	D型 哺乳瓶	計
初産による子嫌いなど	6	7	0	1	14
双子による乳不足など	8	22	5 [*]	3	38
その他の子嫌い	3	0	0	0	3
その他の乳不足	0	2	0	0	2
その他	0	73(62)	4(4)	6(5)	83
計	17	104	9	10	140

母子関係への介入は、137件みとめられた。ただし、1件につき2種類の対応を併用する場合3件があり、のべ140件となる。()内は、みなし子ヒツジにかかわるもので、のべ71件にのぼる。

※養子縁組のやり直しも含む。

にせよ、さらにその背後には、生物的要因がひそんでいる。子嫌いになりやすい要因、乳不足になりやすい要因という生理的な条件がある。双子出産と未成熟段階での初産である。

双子が生まれたとき、母畜が子畜の一方を実子としてみとめる能力に欠けることがある。母子のきずながよくなるのである。また、たとえ実子として認知していても、乳が不足しがちである。ヤギであれば、ヒツジであれば、すべての出産のうち、双子出産はおよそ十五パーセントであり、そのうちのおよそ三分の一について、母子関係への介入がみられた。観察されたあらゆる母子関係介入のうちの、約四割が、双子の事例であった。

ヤギやヒツジは、満二歳、かぞえていえば三歳をむかえる時点で、初産するのがふつうである。ところが、なかには満一歳、去年うまれたばかりでありながらも出産するものもある。未成熟段階の初産は、早産、流産、死産などになりやすい。無事に子畜が生まれても、子嫌いや乳不足になりやすい。すべての介入のうちの約三割が、そうした初産の事例であった。これは、とりわけヤギに顕著にみとめられる現象である。ヤギのほうが、ヒツジよりもやや成熟がはやいという生物的特徴があらわれているらしい。成熟がはやくても、本当に母畜らしくなるには不十分なのであろう。

このような初産と双子出産をのぞいてしまうと、子嫌いや乳不足はそれぞれ二例しかない。このほか、悪天候下で出生したために凍傷にかかった場合が二例あった。母をうしなった事例のうち、よそのものイヌが吠えたという突発的な原因で発生した二匹のみなし子ヒツジの例をのぞくと、のこりは一例であり、それも未成熟段階での出産であった可能性が高い。すなわち、母子関係への介入の契機は、ほとんど、ヤギの未成熟段階での初産および双子出産とにまとめられる。

母子関係の介入は、子畜の養育のためにおこなわれるのだから、介入を必要としているのは実際には、「子」畜である。しかし、介入が必要となるかどうかは、「母」畜に対する状況判断によって決定される

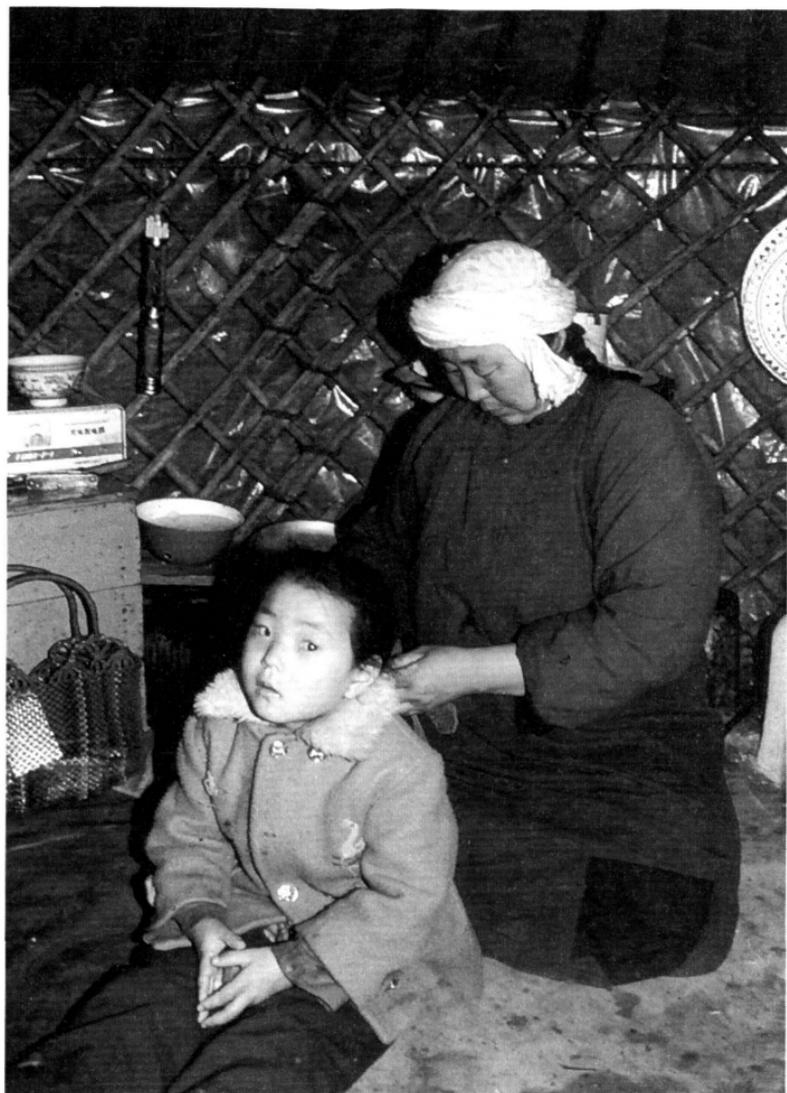
といつてもよい。母になりながら、母であらうとしない子嫌いや、母であることができない乳不足が、介入の契機となる。つまり、「母になる」ことをみたしながらも、「母である」ことをみたさない家畜が、介入の対象となるのである。

家畜の場合には、「母になること」と「母であること」のちがいが、はっきりとあらわれる。本来あるべき母子の姿からの逸脱である。その意味で自然からの逸脱ではあるが、あくまでも自然現象として発生している。自然災害にもいた、いわば自然厄害である。

双子や未成熟初産が、母子関係介入の主たる生理的要因ではあるが、すべてのケースに介入がみられるわけではない。そうした自然現象が、子嫌い現象や乳不足という自然厄害をもたらしっていると判定されることによつてはじめて、介入がうまれる。人為的な判断がはいりこむのである。つまり、人によつて判断が異なり、ひいては、介入のありかたも人によつてちがいがあつた。

子畜の世話をもつばら女性の仕事である。女性が、家畜の母子関係介入で主役をはたすことになる。モンゴルらしい特徴はたとえ共通していても、各人それぞれの介入のありかたには、女性自身の人生がみえかくれる。母としてどのような人生をおくってきたか、あるいはおくっているかという差違が、母子関係介入にもあらわれているような気がしてならない。

チョルム姉さんは、子どもをうんだことがないのに、子ども好きで、よく面倒をみる。子畜の養育にも手をかける。しばしば家のなかに家畜をいれて「飼育」する。こうした飼育は、通常の放牧的家畜飼養とはつきり区別され、かならず「テジェーフ」という動詞がもちいられる。ちなみに、人をそだてることにもテジェーフをつかい、もつばら養子としてひきとることをさす。彼女の場合、子にめぐまれず、生物的な意味で母にならなかつたことがかえつて、母であることをうながしているようにみえる。彼女



姪の髪をゆうチョルム姉さん

は、人にも家畜にも、特別な意図をもって世話をやく「飼育」に専念する人だった。

いっぽう、モージ母さんの「子とらせ作戦」は、じつに手厳しい。あるヒツジがゴロンコイ（子嫌い）になったときのことである。何度も出産を経験したヒツジが、はじめて双子をうんだ。はじめての双子なのだからしかたないとみてもよきそうなのに、モージはけっしてゆるさなかった。その母ヒツジを柱にしぼりつけた。しばられたヒツジは授乳を強制されるのがいやらしく、その場にへたりこむ。べつたりと地に腹をつけてしまうので、子ヒツジを哺乳させることができない。たたせようとしても、ヒツジのからだは重くてもちあがらない。そのときである。彼女は母ヒツジの頭を、手にしていた棒で打った。バシ、バシ、バシ、バシ。何度もくりかえして打ちつづけた。

「なんだって、そうなんだ。いままでずっと母をやってきただろうが。おまえの子だろうが。いいかげんにしろ」

頭を打たれますます反抗的な様子をしめす母ヒツジ。打ちつづけながらもますます興奮する母モージ。とうとう彼女は、そいつの顎を蹴りあげた。ボンとにぶい音がした。トイグ、トイグとよびかけることもなく、ひたすらしごきあげたのである。効果のほどはあらわれなかった。

「ほっとけ。そのうち乳がはってくれば、とるだろう」

双子のうちの一方は、実子として認知している。そこで認知のある子のほうをとりあげて隔離しておき、認知のない子のほうとペアにしておく。そうすれば、そのうちに乳房がはってしかたなく授乳するようになるだろう。そう考えて、モージはその場を立ち去った。

モージ母さんはチョルム姉さんのように、家畜を家のなかに入れたりしない。そうした飼育を嫌いだという。あまやかすのはいやだという。彼女の子畜育ては厳しい。そして、母畜に対しても厳しい。実子を認知しない母畜によびかけながら、授乳をうながすという子とらせ作戦は、そもそも子畜を育てる

ためにおこなう作業である。しかし、モージのやりかたをみてみると、子育てであると同時に、母育てでもあるのだと知れる。母になったものを、母であらしめることに、彼女は厳格な態度でのぞむのであった。

ホクシン・エージは、子宝にめぐまれないばかりでなく、育児の経験もほとんどない。母にならず、母であることもなかった。子畜の養育も容易にあきらめた。

「母になり、母である」ことを人生のなかでみたしてきた女性は、「母になること」と「母であること」とのちがいをみずからの体験としてからだで理解することはできないであろう。たとえば、母モージがそうであるように、ことさらに母であろうと努力する必要はない。また、「母にならず、母であらず」にすごした女性も同様に、それが自然な姿であって、ことさらに母であろうと努力する必要がない。たとえばホクシン・エージ。こうした女性たちは、家畜の「母になり、母でない」現象に対してあまり過剰に介入しない。

家畜の「母になり、母でない」現象に対しては、ペアリングして放置しておけば、危機を回避することができるといえる。乳がはるといふ生理的要求によって、いつのまにか母らしい行動をしむけることができる。かならずしも歌をうたう必要などないのである。ヒツジの「母になり、母でない」現象に対して、トイグ、トイグとうたいかけ、ヤギならばチャイグ、チャイグとうたいかけるといふモンゴルの伝統的な「子とらせ作戦」は、そもそもが過剰な介入である。

こうした過剰な介入に熱心なのは、チョルム姉さんのように、みずから「母にならず、母である」人であろう。自分の人生において、母であろうとつとめる女性は、家畜のなかで発生する「母になり、母でない」現象を放置することができないようである。家畜の現象に介入することによって、自分自身の「母であること」が補完されているのかもしれない。きのうトイグの歌をうたっていたエルデニチメ

グとサラントヤーもまた、「母にならず、母である」女性といえるのではないだろうか。「乳ぬすつとの先生」と称されるほど、子畜の世話をやくエルデニ姉さんと、分家の嫁トヤーとでは、子畜養育のありかたはまったくおなじではない。しかし、二人とも、母であろうとつとめる立場は似ているように思われる。

エルデニ姉は、四歳のときに養女にだされた。モージ母と現在の夫とのあいだに生まれた唯一の娘なので、もともと人手にわたす考えはなかったらしい。しかし、知り合いの富裕な牧戸に子どもがなかった。どうしてもほしいとたのまれて、両親は承諾した、という。富裕な養父母のもとで、彼女はとても大切にそだてられた。養父母のあまやかしかたといったら、ずいぶん大きくなっても、親に靴下をはかせてもらっていたほどだ、とモージは非難する。たとえ非難されようとも、そんなあまやかしかたが、彼女の幸福につながるにちがひなかった。富裕な牧戸の一人娘として、幸福な人生をおくるはずであった。ところが、富めることが罪になる時代がやってきた。文化大革命のあらしが草原をもふきさらしたのである。養父母は犯罪人あつかい。財産は没収。いまは他人のものとなった家畜を、放牧させられる身の上となった。ろくなテントもあたえられず、家族三人とイヌ一匹で放浪に近い生活をおくった。実家でもほとんどおなじような状況にさらされたが、モージはそのとき娘とイヌを自分たちのところへあずけるようにもうしでた。ためらう養父母のまえで、エルデニチメグ姉さんは、

「これは、わたしの苦しみだから」

そういって、養父母のもとにとどまることを選択した。ひとつの時代がもたらしたこの苦しみはやがて消えた。しかし、三十歳をむかえた彼女は別の苦しみをあじわっているようにみえる。彼女は離婚問題をかかえていた。

彼女が成人すると、養父母は婿をむかえた。はたらきものだという評判だった男は、婿入りしてから



顔を洗う子どもたち

呑んでくれに变身。やがて家によりつかなくなつた。二人のあいだには七歳になる娘が一人。母によく似て、おしゃべりである。おばあちゃん子なのかもしれない。母親エルデニチメグは、

「年寄りみたいなしゃべりかたをするんじゃない」

といつもしかっている。一人娘として大切にそだてられたエルデニチメグが、いま母親として一人娘を溺愛している。彼女にとって愛情をそそぐ対象は、この一人娘しかいなくなってしまった。そんな彼女であればこそ「乳ぬすつとの先生」になれるのかもしれない。彼女のトイグは、モージのよびかけるトイグとはちがって、じっくりと時間をかけて子ヒツジに哺乳させ、そのあいだずっととうたうようにくちずさんでいた。

サラントヤーには、すでにとついだ二人の姉のほかに、妹と弟が一人ずついる。妹や弟たちは、母が再婚してから生まれた。サラントヤーがいまでも後悔しているのは、学校へいくのをやめてしまったことである。七歳のとき、寄宿舎から通学

しはじめた。よく学習していたが二年後、夏期休暇を二日後にひかえたとき、母が再婚した新しい父が面会にやってきた。わけもなく家が恋しくなつて、休暇になるまえに帰宅してから、もう二度と学校へはいかなかった。両親は、学校へもどれとは強制しなかった。彼女は牧民がいやではない。しかし、子どもたちには学校へかならずいかせようと考へている。牧民としてこそ、知識が必要だと考へるようになった。数学と漢語を知っている牧民になればよい。自分が子どもの頃には、先のことをよく考へずに、学校をやめてしまったことを残念に思つている。

まじめで、はたらきもののこの嫁を、母モージは、いじめたりしない。けつして悪口もいわない。ただ淡々と、

「乳の出ない家系である」

という。サラントヤ一の母も、その娘たちもみな乳無しだ、とモージ母は断言する。サラントヤ一は、長女のアルターを母乳でそだてることはできなかった。生後六ヶ月になる次女もまた哺乳びんでそだてている。その赤ん坊は、セルゲレンの赤ん坊よりも一ヶ月はやくうまれたのに、そのいとこよりも体格はずっと小さい。乳の出がわるい彼女は、母であるために克服しなければならない問題をずっとかかえてきた。母になったあと、母であることがむずかしいことを、彼女は知つている。

サラントヤ一とは対照的に、もう一人の嫁セルゲレンは、乳にめぐまれている。むずかる赤子にいつでもふくよかな乳房をあてがうことができる。赤子の顔も母乳であらう。まだ子どもは一人しかいないが、容易に「母になり、母である」ことができる女性といえよう。その意味で、モージと共通している。彼女が、家事についても牧事に関しても、姑であるモージの指示にしたがうのは、本家の嫁として当然であるが、いっぽうで、母をめぐるありかたが一致していることの反映であるように思われる。ごく自然なままで、「母になり、母である」ことができる彼女は、トイグの歌をうたわない。

母畜に対して子をとらせるための「うたう介入」トイグ。あるいはチャイグ。この伝統をになうモンゴルの女たちのなかでも、主たるにない手は、みずからの人生において「母になること」と「母であること」との差を経験的に知っている母たちである。牧民の所有する家畜頭数が増加した今日、「うたう介入」は、減少しつつある。手間がかかるとは省略されやすい。過剰なことなので、省略しうる。そうした時代のながれのなかで、なお「うたう介入」を積極的に維持するのは、母になりきらず、母であるろうとする女たちである。換言すれば、そうした時代のながれがあるからこそ、彼女たちの母をめぐる立場がうきぼりになってみえる。